エスピン師訪問記

(Visit of Rev. Espin's Observatory)

山本一清

（一）

一九二四年十一月の中頃、ロンドンを立つて蘇國エデンバラに向ふ途中、自分の心には　エスピン師のタウロウ天文臺を訪ねたいといふ希望があつた。ところが、タウロウといふ町の場所が、手許に持ち合せてゐる小さな地圖には表はれてゐないので、如何なる汽車便によれば都合が好いのか分らない。閉口した結果、ケンブリヂに立寄つたのを幸ひ、其の大學天文臺の人々にタウロウ天文臺の位置をきいて見た。しかるに、意外なことに、誰も詳しい事を知らない。G君は何か詳細な地圖が無いかと、圖書室のあちらこちらの引き出しや棚などを搜してゐられたが、駄目であつた。そこで自分は、

「ダーラムの町から遠くないのだらうと思ひますが、そのダーラムの大學天文臺とタウロウ天文臺との間の距離だけでも知りたいものです。多分、航海暦の中の天文臺一覽表に經緯度が出てゐるでせうから、それを見て見ませう」

と言ひ出すと、

「なるほど其れは思ひ付きだ！ぢれ〳〵」

と、G氏は今年の英國暦を持つて來てくれた。

「經緯度の差によつて、こんな近い兩地の見るのは今始めての經驗だ」

などと君も面白がる。

さて、航海暦の表によれば

ダーラム天文臺は	經度、西徑	〇時六分一九・七五秒
	緯度、北緯	五十四度四六分六秒
タウロウ天文臺	同　同	〇時七分一四・四六秒
	同　同	五十四度四三分三〇秒

と出てゐる。

「だから、タウロウはダーラムの西へ」

殆んどダーラムの眞西と思つても好い。ですから、ミスタ・ヤマモト、貴君はダーラムまで汽車で御出でなさい。それから　哩ほどは汽車などがあるか無いか、其の邊へ行つてから開かなくてはなりますまい。」

こうして、たゞあらましの位置を知り、汽車は、敎へられた通り、ダーラムまで切符を買つて、ケンブリヂを立つた。

（二）

午后八時頃、北行きの汽車の連絡の都合上、ヨーク驛に小一時間ほど下車したので、其の間、驛の内外、市の城壁のあるあたりを散歩して、さて汽車の出るプトラフォムに歸つて來た時、ふと、驛の掲示板を見ると、丁度、このあたり、北都イングランドの鐵道地圖が出てゐる。

「今夜は此の點まで行くのだ」

と思ひながら、ダーラム市の附近の地理を暫く眺めてゐると、意外にも其所に「タウロウ」といふ驛名が見つかつた。急に、大喜びで此の地圖の示すがまゝに、傍らの汽車時間表と見比べて見たところが、タウロウは、ダーラムの少し手前のダーリントン市から便利な汽車が行くことになつてゐる、タウロウはダーラムの西八哩だとケンブリヂでG君が言つたのは、多分緯度と經度とを間ちがへたので、今見ればダーラムの西南十哩に當つてゐる。――これで其の夜は、ダーラム泊りを變更し、ダーリントンに下車することゝした。

（三）

ダーリントンへは夜の十時頃に着いたが、直ぐ驛前の一ホテルに泊り込んで了つた。

翌朝、例になく六時に起床。急ぎ食事して、七時發タウロウ行きの汽車に乘つた。可なり寒い朝ではあるが、英國の汽車は設備が好く、内部が充分に暖められてゐる。窓外は未だ日出前の暗さで、南には有明月が輝いてゐる。暫くすると東から太陽が現はれ、繪にあるやうな英國の美しい田舍の景色が目の前に擴げられて來た。八時十五分タウロウ着すぐこの小さな驛の驛長さんを捕へて、

「エスピン牧師の天文臺は何所ですか？」

ときくと、

「ア、ミスタ・エスピンの家ですか。すぐ此の近くですよ。あれあすこに見えませう。あれがエスピンさんの教會堂で、其の左手に見えるのが家です。こちらから少しまはり道をして五分間もかゝらないで行けますよ。」

天文臺らしいものが驛からは見えないとは思つたが、とにかく、行つて見れば好いと思ひ、教へられた道を歩いた。

（四）

タウロウは、全く田舍の一寒村で、村中の人口が一千もあらうか。通りを歩いて見ると、八百屋や靴屋や鍛冶屋など一通りのものはあるけれど、四方に廣々とした草原をひかへて、牧畜が村人の重な職業らしい。

村の東の端、牛や馬を養ふ牧草野の續きの一部を、垣で圍んだ中に、高く十字架を頂いた教會堂と、可なり大きな構への三階石造りとがある。之れがエスピン氏の住居で、其の家の傍らに、黑く塗つた大桶みたいな二つ三つの建物――之れが望遠鏡を納めてゐるドームだと、近づいて知ることが出來

た。

（五）

「1888」といふ大きなマークを高い所に刻んだ此の三階建の西の入口に立つて、自分は戸を叩いた。すると、一人の老婆が出て來て、

「ミスタ・エスピンは少し風邪の氣味で、今朝は朝ね坊をしてゐられます。ミスタ・ミルバーンを呼びますから、暫く此の室で御待ち下さい」

と、通された時は主人エスピン氏の書齋らしく、一面をガラス窓とし、他の三面は床から天井に屆くまで書物を一ぱいにならべてある。牧師兼天文家の書齋であるから宗教書と天文書とが主として並べてあるのだらうと豫期しながら、見渡すと意外にも此等は神學論集だとか、聖書の注釋だとか、宗教史であるとか、信仰問答であるとか。全部が宗教のものばかり。「少々、變だナ」と思ひながら、一層注意して見ると、書棚では無く、机の上に、使ひ古した聖書とならべて、「Tow Law Observatory」と表紙に書きつけた觀測帳が一冊置いてある。

（六）

二階から降りて來たミルバーン氏は

「ハウ・ドウユウドウ、ミスタ・ヤマモト。大變御早いですね。ミスタ・エスピンは間もなく起きて來られます。それまでの內に、私が望遠鏡を御覽に入れませう。」

「エスピンさんは御病氣だそうですね、如何です？」

「なに、大したことは無いのです。」

そこで、自分はミルバーン氏の導くがまゝに、家からドームのある方へ連れて行つた。

先づ見せられたのは徑九吋半の反射望遠鏡で、黑く塗つた木造屋の、極めて御粗末な、豚小屋みたいな家の中にあるのだつた。

「これは最近に作つたもので、主に、素人の人々に星を見せたりするのに使ひます。……エ、、据付けは總て手製ですよ。」全く無雜作に木を組んで赤道儀に仕上げたものであるが、手ぎは好く出來てゐる。

次ぎに案內されたのが十七吋半の反射鏡室である。これは一八八五年、卽ちエスピン氏が天文觀測を始めて以來、長く使用されてゐる望遠鏡で、四十年の間に、氏はこれによつて幾百幾千といふ程の多數の二重星を發見し、又、變光星や赤色星を觀測したのである。氏は全く此の十七吋によつて、英國といはず、むしろ世界の天文界に名を擧げたものである。この有名な望遠鏡が、やはり、黑塗りの木造家で、御粗末な中に收まつてゐる、天文望遠鏡であるが故に、普通の赤道儀式の兩軸運轉が出來るやうにはなつてゐるが、屋根は動かず、只、南北の子午線の方向に可なり廣く窓が開くといふ丈け

で、「不便に相違なからう」と思はれるけれど、ミルバーン君は、平氣な顔で、いろ〳〵と器械の細部を說明せられる。

其の次に見せられたのが二十四吋のカルヴー鏡を入れた大ドームであつた。之れは一九一四年以來此の所に置かれて、主に二重星觀測のために用ゐられてゐる。現に此の日も接眼部には測微器が取り付けられたまゝになつてゐた。此の測微器も亦手製であつて位置角を測る環の日盛りなど、如何にも亂暴に出來てはゐるが、熟練した主人が使へば、之れでも立派な結果が得られるのかと感じさせられる。――此の二十四吋鏡のドームは他のものに比べて、比較的最も近代式と言へやうか。屋根も一通り不都合無く廻轉するやうに出來てはゐるし、器械全體の赤道儀裝置も、流石に最も手が懸つてゐる。反射鏡の焦點が割合に短かいので、時々は星の寫眞などを撮つたりするといふ話であつた。

（七）

一通り此等の望遠鏡を見終ると、元の家歸へつて來て、

「まだ暫く時間があるから」

とて、三階へ連れて行かれた。此の三階は、一部は寫眞用の暗室にもなり、又、鏡みがきの室もあり、鏡を鍍銀する室もあり、其他、一般の望遠鏡修理工事も出來るやうな設備になつてゐる、又、別の二三の室は

「こゝはミウジアムです」

と言つて通された其の言葉の如く、廊下から室内へかけて、一ぱいに種々なものが陳列してある。物は殆んど總べて此の附近から集めた礦物や岩石の標本であつて、立派な結晶なども可なり數多く並べ、其等を集めた時のあたりの寫眞なども壁にかけたりしてある。すると、見て行く内に、岩石の片々と共に、御しまひには古錢や古い指輪や時計なども列べてあつた。――エスピン氏やミルバーン氏の名は今までは天文の書物の上でのみ聞き知つてゐたのに止まるが、來て見れば、天文は本職以外の余興であつて、尙天文の外に地質や礦物學にも、又廣く古物にも可なりの趣味を持つてゐられる人たちだとわかつた。

（八）

さて、また、二階に降りて、暖かい一室に入ると、そこへ、

エスピン師

大きな體軀の中老人がにこ〳〵しながら入つて來た。これが紹介されるまでもない主人エスピン師である。

「ミルバーン君に一通り見せて貰ひました」

と、禮を言ふと、

「それは結構」

と輕く應じながら、話が天文のことから、旅行のこと、それから日本のこと、アメリカのことなどに移つて行く。

その内に、（もはや時間は十時半だと思つたが、）老婆が朝食のためのパンや茶など運んで來たので、すゝめられるがまゝに自分は

「これは今日の二度目の朝食です」

と笑ひながら頂く。

「これから、何所へ御出でゞす？」

と問はれるから、自分は

「今、エデンバラへ行く途中なのですが、今日の午后はダーラムへ暫く下車したいと思ひます。」

「ダーラム。ふム、それではミスタ・サーゼントに紹介狀を上げますから、訪ねてやつて下さい。――ミルバーン君、君今からミスタ・ヤマモトを自動車に乘せて、一所にダーラムまで行つたら好いでせう」

「さうしませう」

「大變有り難う。しかし私は荷物を今朝ダーリントンの宿に置いたまゝにして來ましたから、是非それを取りに歸らなければなりません。」

「そうですか。それでは駄目だ。殘念だが。」

それから、十一時の汽車に乘るため、自分はミルバーン氏に停車場まで見送られて、正午にはダーリントンに歸つた。

（一九二四、十一、三〇。パリーにて）

二〇

通信

拜啓　五月二日午后二時から、帝大理學部學假教室で日本天文學會の春季總會が開かれました。六十餘名の出席者をみ型の如く報告や理事長などの改選の後、講演に移りました。最初理學士福見尙文氏の「天体より天体への生物の移殖」と題する興味ある問題を二時間餘り論議いたされた。天体に起源する生物の自然發生説や殞石説、或は輻射説などの紹介があり、生物の種子が、寒暑、乾燥、或は光などに依つてどの程度まで死滅せぬかといふ問題に就いて生物學者等の實驗の報告など説かれ、又、光の輻射壓の爲若し種子が太陽から出發したとすると幾十日の後地球へ着くかとか、何々星まで世紀を單位として何十倍とかいふ兎方もない數字さへ語られました。

次の最近御歸朝になつた理學博士早乙女清房氏の「歐米視察談」がありました。これは山本先生の記事もありますから略します。

東京の會員　岩崎良三